

山口は小久保の部屋を出ると施設長室に入り、上井施設長に小久保の要求を伝えた。

「話し合いの場？」上井は山口から聞いた内容を聞き返した。

「そうです。小久保さんは無理難題を言っているわけではないと思います」

「そうかしら。私には無茶な要求に思えるわ。わがままで好き勝手な要求をしてきたらどうするの。また要求が通らないとき、再び食堂で大声を発するかもしれないわ」

山口もその点は同感だった。確かに演説する可能性はあるだろう。しかし、この場で同意を示すと、小久保の提案が却下されるにちがいない。山口は攻め方を変えてみた。「こう考えてみてはどうでしょう。話し合いの場を設ければ、利用者の生活環境の改善を一番に考えている施設というイメージが強くなります。これは地域社会からのウケもいいです」

「利用者ファースト、好印象ってわけね」

山口は表面的な笑顔を作った。

「いいでしょう。では明日の責任者会議で提案してみて」

山口はうなずいた。「否定的な意見も出るかと思いますが、万が一うまくいかなかった場合でも試験的に行なう、という落としどころで進めていきたいと思いますので、その際はご協力をお願いしたいです」

「ええ、分かったわ」上井はそう言うと、デスクの書類に目を落とし読み始めた。

山口は念を押す。「私の協力とは、私の提案を後押しするような言葉をいただきたい、ということです」

「あなたに任せます」上井は山口に目を向けることなく言った。

山口には上井の言動から、まるで他人事のように感じられた。山口は軽く頭を下げると自分のデスクに着いて小さくため息をつき、パソコンのモニターを見つめながら思った。無関心か、でも俺に対して否定的な姿勢をみせないだけでもまだ。

山口は気持ちが晴れないままデスクの引き出しを開けて、中から介護職員から回収したアンケート用紙を取り出してデスクの上に置いた。このアンケートは山口が一週間前に介護職員対象に行ったアンケートだった。先日、山口は上井に施設内勉強会の改善案を提案した。勉強会をより組織的に実施する内容を上井に提案し、了承をもらおうとすぐに職員アンケートを作成し配布したのであった。今までの勉強会の内容は、教育委員会が作成した紙ベースの資料を各フロアの介護主任に配布し、その後フロアの介護主任が自分のフロアの介護職員に資料を読み上げるだけという方法であり、質疑応答、意見交換もなくただ聞いて終わりというお粗末なものであった。

山口は上井に、今後の勉強会は今の各フロアでの読み聞かせの形から日時、場所を特定して職員を集めて開催する形に変えていく方法を提案した。そして自分が教育委員会のフォローとして入り、企画運営の手助けをおこないたい旨も伝えたと、上井は二つ返事で承諾したのであった。

回収したアンケートからは、様々な要望や意見が挙がってきた。介護技術から病気や障害の知識など介護職として基本的な内容から中には介護福祉士試験対策の希望、リーダーシップについて学びたいなどの要望もあった。また現場介護スタッフの人手不足の問題を訴えてきた内容まであった。

山口が全てのアンケートを読み終えようとしたとき、一枚のアンケートで彼の表情が硬くなった。山口はそこに書かれている文字からしばらく目を離すことができずにいた。その文字は他のアンケートで使われていたボールペンの文字ではなく、太いマジックで力強く書かれていたのである。

尊厳のない介護は恥！

また、用紙の下には名前が記載されていた（名前の記入は任意とアンケート用紙には記載していた）。山口は無意識にその名前を口に出して読み上げていた。

「古賀綾子」

山口は古賀綾子の名前から顔を思い浮かべることができなかった。「どこのフロアだ」山口は引き出しから各フロアの勤務表が綴じてあるファイルを取り出して彼女が勤務するフロアを探し始めた。「ここか」彼女の名前が二階の勤務表に記載されていた。そして彼女の今日の勤務を確認すると日勤だった。山口は二階に内線かけた。

「二階フロア古賀です」電話にでたのは古賀綾子だった。

「山口です」

「お疲れ様です」

「ちょうど良かった。古賀さん、君にお願いがあるんだけど」

「え、私にですか」

「今日、日勤でしょ。仕事が終わったら私のところまで来てもらいたいんだけど。ちょっと聞きたいことがあるんだ」

「説教ですか」古賀は冗談交じりで言ったつもりだが、声に緊張が出ていた。

「そんなんじゃない。大丈夫かな」

「はい、大丈夫です。仕事が終わったらお伺いします」

山口は内線を切ると時計を見た。時計は午後四時半を指していた。山口は勤務表のファイルを引き出しに戻し、再びアンケートに目を通し始めた。

山口が部屋の時計を見たら、時計の針は午後六時前を指していた。上井施設長はすでに退社し、部屋には山口しかいなかった。その時、ドアをノックする音が聞こえたと同時に古賀が入ってきた。

山口は立ち上がった。「仕事が終わって疲れているところ申し訳ない」山口はソファを指した。

古賀は山口に勧められたソファに腰を下ろした。「用件は何でしょうか」

山口は古賀の正面に腰を下ろした。「君の勉強会のアンケートだよ」

古賀は少しの間、眉間にしわを寄せながら思い出そうとしていた。やがて、目を見開いた。「あー、思い出しました」そう言うと、すぐに口をつぐみ、あごを引くと上目遣いで山口を見つめた。「あれ、駄目でしたか」

「いや、駄目じゃない。あの言葉を見て、もう少し古賀さんの思いを聞きたくなってね。覚えているよね、書いた内容」

「ええ、当然です」

「では、教えてほしい。尊厳のない介護、ここでそれを感じている理由は何」

「逆に介護長は感じませんか」

「例えばどんな時に」

「どんな時って、沢山あっていちいち説明できません」

「説明できないと、相手には伝わらないよ。アンケートの言葉、あれは私へのメッセージだよ。そのメッセージを私はしっかり受け止めたい。だから教えてほしい」

古賀はしばらく山口を見つめた後に言った。「ここの職員、全員とは言いませんが、利用者に対しての言動、聞いてて我慢できないときがあります」

「どんな言動があったのかな、例えば」

「例えば、命令口調、ダメ、待って、座って。それに、何度言えば分かるの、たいてい命令口調で上から目線」古賀は大きくため息をついた。「介護福祉士の資格を持っている職員も言ってるんですよ。信じられます」

「ここでは恒常的になっている？」

古賀は当然と言わんばかりに大きくうなずいた。「目上の人であり、不幸にも病気になり障害を負った人ですよ。いくら介護技術のスキルを上げたって知識を広げたって、利用者を敬う尊厳がなければ介護をしてもらいたくありません」

「守られるべき尊厳をここでは感じられないのかな」山口は尋ねた。

「ええ、私達が介護してあげているんだ、の意識が蔓延しそうです」

「このまま放置していたら本当に蔓延しそうだね」

「気遣いのない介護は」そう言うと古賀はうつむいた。「介護を機械的に処理してしまう。そうなった現場を想像するだけで怖いです」

「怖い？」

古賀は顔を上げ山口を見ながら言った。「だってそうじゃありませんか」古賀の口調が強くなった。「日々の言動に気遣いの意識がなくなれば、まず言葉の乱れが出てきませんか。そしてその乱れが口火となって自製のコントロールが失われ虐待や大きな事件を誘発するかもしれません」古賀の口調が次第に興奮のため早口になってきた。「介護の仕事は誰でもすぐにできるイメージがあるように見られがちですが、そうじゃありません！ 本来の介護は正しい知識に基づき、根拠を持ち合わせた判断と技術力が求められます。そしてなにより介護を提供するにあたっては常に倫理観を自覚しなければなりません！」そう言うと古賀は自分が感情的になり、自分の口調が荒立っているのに気がつく、苦笑いを浮かべながら言った。「すみません、つい感情的になってしまっ」

山口は笑みを浮かべながら首を横に振った。気にしないで。

山口は彼女が危機感を感じていることを確信できた。そして彼女が危機感だけを持っているのか、それとその危機感を回避するための考えをもっているのか探りをいれた。

「では古賀さん、最悪な状況を避けるためにはどうしたらいいと思う」山口は尋ねた。

「空気の入れ換えが必要です」即答した。

「空気の入れ換え？ どういうことかな」

「新しい風を現場に吹かせることで職員の意識が変わるかもしれません」

「新しい風、いい響きだ」そう言うと、山口はソファの背もたれに寄りかかった。「では最初にどんな風を吹かせればいいと思う」

「介護長がアンケートでアナウンスした勉強会の開催です」古賀は話すのをやめるとしばらく山口を見つめた。

山口は古賀の目が何かを訴えているように感じ、古賀の言葉を待った。

「聞いていいですか」古賀が言った。

山口はうなずいた。

「予定している勉強会は今までと同じ形ですか」

山口が答えようとした時に古賀が話し始めた。「それじゃ意味がありません。今までの勉強会は教育委員会が作成した紙ベースのものを現場に落として介護主任がただ読み上げるものです。正直言って、こんなの勉強会とは言えません。本当の勉強会は講師が立ち、講和やグループワークなどの形を取り入れ職員同士で議論したりすることで、新たなスキルや知識、技術を得ることができるものじゃありませんか」そう言って山口の言葉を待った。

山口はうなずいた。「私も君と同意見だ。それから今後の勉強会だけど、企画運営は今までどおり教育委員会がおこなうが、私が教育委員会を取りまとめていく」

山口は小久保の言葉を思い出した。同じ志を持つ者を見つけだせ。山口は身体を背もたれから離して身を乗り出した。「もう一度聞くけど、ここの職員は新しい風が吹けば意識が変わると思うかな」

「はい、もう分かっていると思いますが、新しい風を吹かすのは介護長ですよ。介護長が道しるべを示し、かつ、その道しるべが明確で常にブレないものであれば」

山口は安心した。彼女は駄目な職員を色眼鏡で見していない。決まりだ。山口は満面の笑みを浮かべた。「古賀さん、一緒に風を吹かせないか」

古賀はしばらく黙り続けていた。新しい風、この言い回しが何を意味しているのかは理解できていた。「本当に私でいいのですか。介護長が思うような働きができるかわかりませんよ」

「私も完璧な人間じゃない。この施設を変えていく為には、フォローしてくれる協力者が必要だ。同じ志をもつ協力者がね」

古賀は山口から視線をそらし、しばらく考え込んだ。そして視線を山口に戻した。その顔には笑みが浮かんでいた。「毎日くすぶっているのも、いい加減飽きました。誰かが声を挙げて動かないと変わりませんものね。分りました、協力させていただきます」

「ありがとう」

山口が立ち上がると、古賀も続いて立ち上がった。

山口は古賀に手を差し出した。「利用者の尊厳のために」

古賀も手を差し出し、二人は握手をした。

「尊厳のために」

山口は古賀に礼を言い、古賀がドアの方へ歩き出した。途中振り返り山口を見た。

「これから私は何を」

「まずは今年度における勉強会の計画の検討だ。そして最初の勉強会のテーマは利用者の尊厳と介護職の倫理でいいかな」

古賀は力強くうなずいた。「ですね」

「打ち合わせをする日時の検討はおって連絡するよ」

古賀は敬礼をした。「イエッサー、ボス」

医事課の松下直美が退社しようとデスクから立ち上がった時に澤田が声をかけた。「なんなのもう」松下はため息まじりに小声で言うと、澤田のもとに向かった。

「何でしょうか」

澤田はパソコンのモニターから目を離さず、キーボードを打ちながら言った。「利用料金の滞納の回収状況はどうなってる」

「確か未納者の七割ほど回収できてます」

「未納者のうち、滞納期間が長い者は誰」

「藤田さんです。四ヶ月分になります」

澤田のキーボードを打つ手が止まった。視線をモニターから松下に移した。「藤田？」

「ええ」

「藤田って、二階の藤田か」

「ええ」藤田は他にいないわ。

「あのネズミの藤田か」佐藤はキーボードから手を離し、背もたれに寄り掛かった。両腕を肘掛けに乗せ、両手を腹の上で組んだ。「四ヶ月か」

松下はうなずいた。

「回収の見込みはどうなんだ。回収の相手は」

「息子です。電話で何度も連絡をしているのですが、全く連絡がつきません。でも督促状を郵送してます」

「連帯保証人は」

松下は首を横に振った。

「連絡つかず、か」そう言うと、松下から目をそらし、しばらく遠くを見つめた。

松下は澤田の言葉待ちながら思った。もう退社の時間を過ぎているのよ。これから私になにをしろと言うの！

澤田が舌打ちをしたあとに言った。「滞納の常習者が好き勝手にネズミを飼ってやがって。なめられたもんだ」そう言うと澤田は松下に顔を向けた。「ネズミの餌代は請求しているんだろうな」

「はい」

「四か月か」そう言うと、視線を天井に向け、背もたれに身を委ね、身体を揺りかごのように前後に動かし始めた。「金にならない奴は用なしだ」

松下は天井を見つめる澤田を見て思った。何を企んでいるの？

澤田が身体の動きを止めた。「この施設から消えてもらうか」

松下は澤田の言葉が独り言なのか自分に同意を求めているのか分からなかった。松下は澤田の言葉を聞いた途端、本能的にこの場をすぐにでも離れたい衝動にかられた。それは澤田が事務長としてこの施設に異動した以降、入所してる利用者が利用料金の未納が続いた途端、その利用者の体調が急変し亡くなってしまったり、長期入院となり退所させられた事例が数件起きていたのである。

「もう、よろしいでしょうか」松下は早口で言った。

「俺は前の事務長とは違う。今までどおりに過ごせると思うなよ」そう言うと視線を松下に向けた。「終わりにさせてやる」

「もう退社時間を過ぎていますので失礼します」松下はここにいることに限界を感じ、澤田の返事を待たずに、その場を離れた。松下は澤田がこれから何をするのか知りたくもなかった。

